



第1会場●2F 第4研修室

■司 会／大城喜江子 NPO法人なはまちづくりネット 代表
松本 英俊 長崎県長与町教育委員会生涯学習課 指導員

分科会の進め方

10:45~10:50

1 別府プロジェクト:子どもとアーティストの出会いの演出 —子どもが挑んだコミュニティダンス・ワークショップの5日間—

10:50~11:20

安達美和子(大分県別府市 NPO法人BEPPU PROJECT)

企業の支援を受け、「ダンス表現」を素材に子どもとアーティストの出会いを演出して5日間のワークショップを開催した。個々の子どもの日常にそれぞれ独自のダンスを造り上げ、学校をステージに公演・発表会を実施し、創造力、表現力など子どもの成長を促すことを目標とした。同時に活動を見守った先生方や保護者のみなさんの、子どもとアーティストの出会いの意義に対する評価の向上を目的とし、大分県における広報効果を重視した。

2 遊限会社「子育て建設」による幼児教育ネットワーク —お父ちゃんの背中ではでっかいぞ—

11:25~11:55

三浦 竜也(島根県益田市 遊限会社「子育て建設」 代表)
塩満 保(島根県益田市 都茂公民館 副館長)

未就学児を持つ忙しい父親(保護者)有志が、子どもと遊ぶ時間を限りなく作る目的で遊限会社「子育て建設」と命名し結集。公民館等の社会教育施設を拠点としたプログラムを創造し、地域で子育ての輪を広げる。この内容は島根県にも認められ、島根県の「実証『地域力』醸成プログラム事業」の助成を受け、公民館と協働の形態を取って活動している。父親(保護者)相互の交流が深まる様子は、地域で取り組む機運の向上にもつながり、今後は小学校低学年まで活動の輪を広げる予定である。

3 小学生の宿泊・野外体験プログラムの実践蓄積に見る教育効果 —佐賀県白石町立有明西小学校の体験活動の企画と地域連携—

12:00~12:30

百武 博文(佐賀県白石町立有明西小学校 教諭(教務主任))

中・高学年を対象に、学校行事として通年で段階的、断続的に実施する長期宿泊や野外活動プログラムを企画。地域のキャンプ協会、ボーイスカウト、PTAなどと連携し子どものコミュニケーション能力、社会性、自立性の向上を目指した。成果は、目的とした子どもの変容に関してプログラムの妥当性が検証され、地域との協力・連携の体制を整えることができたことである。



第2会場 ● 2F 自由研修室

■司 会／伊藤 浩規 福岡県教育庁北筑後教育事務所 主任社会教育主事
中吉浩一郎 岡山市教育委員会生涯学習課 課長補佐

分科会の進め方

10:45~10:50

1 「関係育ち」の子育てひろば「ぼっかぼか」の思想と実践 ー「親力」・「中高生力」のエンパワーメントー

10:50~11:20

桑田久美子(長崎県雲仙市 NPO法人子育てネットやまぼうしの会 理事長)

平成16年頃から始めた子育て支援グループの試行錯誤が実って、平成20年、雲仙市の市民提案事業に採択され「子育てひろばぼっかぼか」の移動型子育てひろば「ぼっかぼか」の活動を開始。活動の中心は、地域のボランティアで結成した「やまぼうしの会」。平成22年度からNPO法人として活動。活動の主眼は子育てに関わる人々の「関係育ち」である。参加している親や中高生・地域の当事者意識が向上し、力をつけて行くエンパワーメントこそが最大の成果である。

2 日野ボランティア・ネットワークが組織化した地域力 ー災害に学ぶ相互支援の企画と実践ー

11:25~11:55

松田 暢子(鳥取県 日野ボランティア・ネットワーク 事務局長)

平成12年鳥取県西部地震で被災した日野町では、全国から駆けつけてくれたボランティアの精神に接したことを契機に隣近所の枠を越えて「知らない人でも助け合える」新たな関係づくりが必要であることを認識し、日野ボランティア・ネットワークを組織化した。高齢者支援を中核の活動として様々な個人・団体に呼び掛け活動を展開する過程で新たな活動が生まれるなど地域力の向上を実感している。現在、会員数約40名、拠点を西部地震展示交流センターにおいて毎月第2土曜を定例活動日としている。

3 公民館で育った地域創造活動「夢講座」17年の成果と軌跡 ー主催事業から自主活動を経て協働事業に展開した活動企画の未来課題ー

12:00~12:30

中村由利江(広島県府中町 地域ボランティアグループ「夢講座」 代表)

「夢講座」の現在の機能は各種団体・個人との協働を可能にすることである。定例の企画協議・研修は月1回。内容により回数は変動する。成立した原案をもって公民館、小学校、図書館などに協働を働きかけている。具体的な活動内容は折り紙、そば打ち、ジャズコンサートの企画、子育て支援イベント協力など協働対象の要望に対応している。50代後半という人生の変動の中で今後の実践活動を模索している。



第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／池田 恵太 佐賀市立循誘公民館運営協議会 主事
三瓶 晴美 たぶせ雑学大学 代表

分科会の進め方

10:45~10:50

1 地域ぐるみで取り組む琴浦町「10秒の愛キャンペーン」の推進
—0歳から15歳までの子どもの自尊感情を育む親子の絆づくり—

10:50~11:20

浜川 明(鳥取県琴浦町教育委員会社会教育課 社会教育主事)

仲島正教氏が提唱している「10秒の愛」の取り組みを、H19年度から全町で展開し始めた。琴浦町PTA連合協議会、町保育園保護者会連合会、琴浦町青少年健全育成協議会、琴浦町教育委員会が協働し、幼保・小・中連携を活かしながら、学校・家庭・地域で共通した取り組みを行うことで、異年代の保護者が共通理解を図り、家庭で子どもの自尊感情を育む実践を促すと共に地域での人権感覚の醸成にもつなげて行こうとしている。

2 「南陵太鼓」から「南陵塾」へ ～人が人を育てる～
—次世代に繋げる地域一体型社会教育—

11:25~11:55

斉原 直樹(福岡県鞍手町 南陵塾 塾長)
森 健一郎(福岡県鞍手町 南陵塾 理事)

今から25年前、鞍手南中学校では生徒のエネルギーが負の方向に向かっていった。この状況を打破する為に教師と生徒が一体となり、文化祭で演奏した和太鼓が、地域の人に感動を呼び、未来へ残していこうとする気運が高まり、保存会が発足した。その後、中学校を巣立ったOB達を中心となり、後輩の指導や中学校のバックアップを行う構図ができた。やがて、太鼓を通して地域を活性化させたいという青年層の熱い思いは、演奏活動に留まらず、必然的に青少年健全育成全体を発想する「南陵塾」構想に至った。南陵塾は、青少年健全育成、子育て支援、健康促進、地域発展、スポーツ及び伝統文化活動の振興に寄与する活動を行っている。

3 公民館のコーディネイト機能による小学校との学社融合事業の創造
—公民館講座生が指導する学校クラブの通年プログラム—

12:00~12:30

林田 匡(熊本県熊本市教育委員会事務局生涯学習課秋津公民館 社会教育主事)

連携の拠点を公民館に置き、地域の人的教育資源を通年の単位で学校教育に投入し、合わせて公民館講座生の学習成果を地域還元するプロジェクトを同時遂行する融合企画である。学校と公民館双方の条件調整を行ない、新しい地域教育の在り方を生み出している。学校の柔軟性、公民館の臨機応変の能力が事業を可能にしている。世代間交流の促進はもとより、子どもの社会性、公民館講座生の生き甲斐などさまざまな教育効果を生んでいる。



第4会場 ● 4F 大研修室

■司 会／堺 裕明 福岡県教育庁筑豊教育事務所 主任社会教育主事
脇黒丸陽一 鹿児島市教育委員会教育部生涯学習課 課長

分科会の進め方

10:45~10:50

1 いつでも、誰でも、どこからでもの総合的子育て支援プログラム
-「子育て支援センターゆめ・ぽけっと」の次世代育成支援-

10:50~11:20

黒木 由美(佐賀県佐賀市 子育て支援センター「ゆめ・ぽけっと」 所長)

サービスの対象は就学前の乳幼児とその親。平成19年開館。市街地中心に拠点を置き、市内全域の26公民館と提携して、「いつでも、誰でも、どこからでも」をサービス原理として、ひろば事業、相談事業、交流発信事業、子育て支援団体の育成・強化・一時託児など子育て支援プログラムを総合的に展開する。職員は全員保育士または保健師の専門職。開設2年8ヶ月で利用者はすでに10万人を突破している。

2 石窯を核とした食育によるコミュニティ形成の未来企画
-宇城市「まちづくり1%」事業による地域交流拠点づくり事業-

11:25~11:55

内富 裕登(熊本県宇城市立豊福小学校 平成21年度PTA会長)

地域交流の活動拠点としての地域内の「小学校」を開放して頂き、校内にピザやパンを焼く石窯を手作りで新設。地元食材を生かした食育を中核として、地域における老若男女の交流活動を展開する。達成すべき目標は、①地域内交流の促進、②地産地消と食育の推進、③青少年の健全育成である。平成22年からの本格実施に向けて、今回は、その事業についての考え方と計画の概要を報告する。

3 絵本でつなぐ子育て支援の輪
-「出会い」「継続」「地域ぐるみ」をキーワードに-

12:00~12:30

安光真裕美(山口県山口市 おはなし玉手箱 代表)

兜坂 招雄(山口県 山口市秋穂地域交流センター コーディネーター)

読書推進を核とした子育て支援活動を地域のコミュニティセンター、公民館図書室、小中学校、保健センターなどを拠点に展開している。一人から始めた絵本の読み聞かせをグループ化し、その後、子どもの成長に寄り添うようにさまざまな活動グループが生まれ、それぞれが連携して活動を継続している。また、地域の幼保育園と連携して、絵本の読み聞かせを取り入れた「子どもの生活リズム向上プロジェクト」にも取り組み、地域ぐるみの子育て支援へと広がっている。



第1会場●2F 第4研修室

■司 会/緒方 友希 熊本県宇城市立小川小学校 教諭
久保 淳一 薩摩川内市教育委員会社会教育課 社会教育グループ長

分科会の進め方 13:30~13:35

**1 子ども会活動が生み出す地域の活力
—子どもの笑顔が村を変える—** 13:35~14:05

糸嶺 直生(沖縄県座間味村 慶留間子ども会育成会 会長)

毎週土曜日の定例活動を通して子ども会行事を企画し、行事の展開に慶留間村の青年会、老人会などの指導を依頼している。依頼した子ども会と依頼された団体の間に協働の状況を創り出せばそれが地域行事へと成長する。近年の稲の栽培、ジャガイモづくり、そば打ち、陶芸、慶良間ツツジの植樹、慶良間鯉節の開発などの活動に参加する子どもの笑顔が世代間交流と地域の活性化に大きな効果を発揮している。

2 学校統合を契機とした保小中高の連携した取り組み 14:10~14:40

藤原 博(島根県雲南市立掛合小学校 平成21年度PTA会長)

小学校5校の統合を機に保小中高が地理的に近接した利点を活用して、4校が連携した取り組みを始めた。連携活動は、既存の教育課程の内外両面で展開している。活動を支えているのは、地域、PTA、保護者会、スポーツ少年団などの団体、及び各機関、団体等に所属する役員、コーディネーターである。連携をとおして学校、家庭、地域での子育ての充実発展、連帯の促進、地域の活性化を目指した活動をしている。

ティータイム 14:40~15:05

**3 光ジュニアクラブが創造したヤングカルチャーと中学生リーダーの歴史的意義
—青少年ボランティア育成事業27年の思想と実践—** 15:05~15:35

守岡 勝正(光市青少年ボランティア育成協議会)
石川 博之(光市青少年ボランティア育成協議会)
松本 年正(光市青少年ボランティア育成協議会)
浴口 努(山口県光市教育委員会 社会教育主事)

発足は昭和58年。教育委員会に事務局をおき、月1回程度の講座と企画会議を定例化している。養成したリーダーは延べ2,731名、21年度は過去最高の166名。研修内容は、子ども会の支援、地域ボランティア、リーダー研修、ふれあい活動の4部門、各学校には校務分掌として中学生リーダー担当を位置づけ、活動のプロセスは「中リー・光ジュニア通信」で報告される。「中リー」は市民に溶け込み、あらゆる方向から協力依頼が来るようになっている。

**4 子育てネットワーク大分集会の「継続の力」
—生み出された成果・未来の課題—** 15:40~16:10

宮崎 克己(大分県中津市 子育てネットワーク大分 事務局長)

県内有志約40人による実行委員会形式で企画・開催。各種の助成を摸索して本年度で7回目。ネットワーキングの内容は親子で参加できるプログラムの企画と実施、情報の交換・交流、具体的なものづくりの体験、大学や学生との連携など。継続効果により知名度も上がり、リピーターが定着し、子育てに関心を寄せる次世代の学生や市町村行政の参画も得られるようになってきている。



第2会場 ● 2F 自由研修室

■司 会／蘭 三恵 佐賀市教育委員会社会教育部社会教育課 主査
渋谷 秀文 島根県益田市立吉田小学校 教諭

分科会の進め方

13:30~13:35

1 桜島丸ごとエコミュージアム構想とエコツーリズムへの結合

13:35~14:05

福島 大輔(鹿児島県鹿児島市 NPO法人桜島ミュージアム 代表)

桜島をまるごと博物館と考え、桜島についての資料の収集保存、調査研究、教育普及に関する事業を行うエコミュージアム構想の成果を観光、教育、地域振興、福祉、防災等に生かし、地域の人々、児童・生徒を含む子どもたち、観光客など、多くの人々に対する生涯学習、環境学習、地域づくり活動に寄与することを目的としている。エコミュージアムとエコツーリズムを融合させることで、ハード整備に多大な資金を使うことなく、地域をまるごと博物館とする事業が展開できるよう試行錯誤の活動を蓄積しているところである。

2 馬を中心とした自然体験の通年的提供の総合的プログラム ーポニーのいるひと育ち広場ー

14:10~14:40

石井 博史(鳥取県鳥取市 社団法人ハーモニカレッジ 理事長)

平成7年から鳥取と関西の家族を対象として自然体験の拠点としてポニーのいる牧場を開設。メインプログラムは「通年的ポニークラブ」と「合宿型ポニーキャンプ」と乳幼児と親を中心とする「おひさま広場」。草の根的に発足した団体で、ボランティア30名、正会員330名の会員によって支えられた社団法人として運営している。「ケガと弁当は自分持ち」が基本方針。「人生大学」として青年ボランティアを育成し、組織化し、共に活動の輪を広げている。

ティータイム

14:40~15:05

3 学社連携「幸中朝学」 ー新しい地域教育力を創造する学校・PTA・公民館・大学ー

15:05~15:35

山本 健志(福岡県飯塚市立幸袋中学校 教頭)

学校発の学社連携事業である。連携の環は学校・PTA・公民館・大学の四者で構成している。目標は中学生の学力向上と基本的生活習慣の形成である。講師は地元位置する国立大学の学生陣。会場の提供には公民館が参加し、活動の見守りはPTAが責任を持つ。学校は「朝学」事務局を設置して関係機関の連絡調整を行なう。参加している生徒も、その保護者も、指導に当たっている大学生も、学校も、陰の力の公民館も「朝学」評価は絶大である。

4 郷土芸能「浮立(ふりゅう)」の保存・振興策の実践と世代間交流の創造 ー自治会活性化モデル事業によるまちづくり実験ー

15:40~16:10

森 正芳(長崎県時津町 浜田郷浮立保存会 会長代行)

浜田郷の「浮立」は150年の歴史を有し、近年は記念行事のみの祭事と化していたものを自治会活性化モデル事業として地区内行事として再編成した。目的は地域の活性化と親睦・融和である。モデル事業の指定により保存会と自治会の一体的取り組みが可能になり、練習施設や予算の確保も可能になった。最大の成果は住民相互のコミュニケーションが緊密になりつつあることである。



第3会場 ● 4F 視聴覚室

■司 会／石飛 安弘 雲南市地域委員会連絡会 会長
眞鍋 幸一 愛媛県県民活動推進課 課長

分科会の進め方 13:30~13:35

1 無職少年等相談・支援事業
ー「萩ユースふれあいスペース事業」が目指したものー 13:35~14:05

末永 光正(山口県 萩ユースふれあいスペース事業 総合コーディネーター)

山口県の助成を受けて平成15年に開設。老人福祉センター・公民館を拠点に展開。様々な事情により職業に付いていない青少年の自立に向けた指導支援を行ない、これまでに延べ50人以上の参加者に対して「学習支援」、「ボランティア体験の準備」、「野外活動」、「職場体験」等の機会を提供して来た。課題は、対象者の正確な把握、当人のプライバシーの問題、予算確保であり、フリースクールなど関係機関との連携を摸索している。

2 子どもを育てる地域の基盤形成につなぐコミュニティ・スクール
ー学校・家庭・地域の連動(コンビネーション・プロジェクト)を通してー 14:10~14:40

今村 隆信(福岡県春日市立春日西小学校 校長)

コミュニティ・スクールの運営理念は学校、家庭、地域の資源や教育力を結集することである。まずは、第1ステージとして、学校、家庭、地域の実態と課題を明らかにし、教育目的を共有し、7つのプロジェクトにそれぞれの役割を分担した。第2ステージは、プロジェクトの成果を継続しつつ、コンビネーション・プロジェクトとして相互に連働し、「公民館寺子屋」や「地域人材のバンクづくり」を推進する。

ティータイム 14:40~15:05

3 創作民話本「尾道草紙」の企画・執筆・挿絵・出版・活用
ー尾道大学による地域資源の発掘と活性化の実験プログラムー 15:05~15:35

田村 禎英(広島県 尾道大学創作民話の会 代表)

2006年より日本文学科と美術学科の連携により地域に根差した新たな創作民話の制作活動を継続し、すでに5冊の出版を実現している。文章は日本文学科「文芸創作演習」受講生有志が、挿絵は美術学科学生有志が担当する実習・実践型の教育プログラム。地域資源の発掘と活性化を目標とし、尾道市立中央図書館との協働による朗読コンサートも実現している。出版活動資金には尾道大学特別研究助成金を充当している。

4 ホタルの里づくりでまちづくり
ー心のホタル、連帯のホタル、まちおこしのホタルー 15:40~16:10

井塚 照雄(鳥取県南部町 金田川ホタルの里 代表)

ホタルは日本の原風景。有志が取り組んだ原風景の回復は子どもたちに自然環境保全の大切さを教え、地区民の連帯意識を強めた。ホタルの乱舞は世間の注目を集め、観光客を引き寄せ、駐車場の整備も整った。期間中には区内の子ども会、いきいきサロングループなどがバザーを出し、町主催で「ホタルウォーク」も実施される。観光客にもホタル観賞マナー(光・騒音)の向上をよびかけ、ホタルの里づくりでまちづくりが進んでいる。



第4会場 ● 4F 大研修室

■司 会／太田黒保宏 熊本県生涯学習推進センター 社会教育主事
森脇 康 大分県教育庁社会教育課社会教育班 社会教育主事

分科会の進め方

13:30~13:35

1 五ヶ瀬風の子自然学校
—社会教育から発達支援・子育て支援・地域の未来づくりへの循環—

13:35~14:05

杉田 英治(宮崎県 NPO法人五ヶ瀬自然学校 理事長)

法人の設立は平成17年。鞍岡小学校の児童数は62名。その内57人が登録し、毎日50人の子どもが自然学校にやって来る。参加費は一日100円、十日以上は一律月1,000円。プログラムは「朗唱」、「宿題」、「異年齢の遊び」で構成している。社会教育ではじめた少年教育は発達を支援し、子育て支援にも連続している。コミュニティビジネス、グリーンツーリズムなどの模索も開始している。

2 無人島チャレンジキャンプの人間形成力
—出会い、発見、ゆめ体験in御五神—

14:10~14:40

仙波 英徳(愛媛県松山市 無人島チャレンジ実行委員会 実行委員)
田井 通臣(愛媛県松山市 無人島チャレンジ実行委員会 実行委員)

「不便」、「不足」、「不自由」がキー概念。目標は「自立」、「協調」、「社会性」の育成。方法論は異年齢による長期・宿泊・自然体験を核としている。無人島チャレンジの特徴は「自給自足」、「環境学習」、「環境造形」プログラム。効果の検証は愛媛大学との提携、保護者に対する報告会、実行委員会による「振り返り検証」を行なっている。期間は9泊10日、参加費2万円。最大の課題は財源の安定的な確保である。

ティータイム

14:40~15:05

3 デイ・サービスと子育て支援センターの併設によるコミュニティづくり
—支援活動は交流と活力の原点—

15:05~15:35

澤 健(岡山県赤磐市 NPO法人元気交流クラブ「たけのこの家」 理事長)

総人口約15,000人のニュータウンに、介護保険のデイサービス(定員17名)と会員制子育て支援センター(定員親子9組)の事業を併設した統合ケア。対象は概ね3歳以下の子どもとそのお母さん。現在は行政の委託事業として展開中。本年度は学校支援地域本部事業もスタートし、「子育て支援を通じたコミュニティづくり」をさらに展開している。

4 情報モラル育成のための産官学民連携による地域的教育実践
—インターネット活用実践教育「総理大臣賞」受賞までの経緯—

15:40~16:10

陣内 誠(佐賀県佐賀市 Kodomo2.0(ITサポートさが) 広報担当)

「ITサポートさが」はインターネットの諸問題に関心を共有する研究者、教育者、企業、行政など多様なメンバーで構成され、現在20名を越える。活動の目的は、情報教育を通じたデジタルデバイトの解消と健全なネット環境の実現である。サポートの対象はあらゆる年代の佐賀県民。具体的には行政やPTAと協力し、県内4カ所に中継してインターネット時代の家庭教育学級:「ネット時代の親力養成講座」など演習と講演を実施した。ネット活用の手法と内容が評価され第9回インターネット活用教育実践コンクールで総理大臣賞を受賞している。

1st day
5.15 Sat.

特別報告 ■時間/ 16:30 ~ 17:00 ■会場/ 4F 大研修室

テーマ●「生涯現役の方法 —「生きがい」の構造—」
三浦清一郎

2nd day
5.16 Sun.

特別企画 ■時間/ 9:00 ~ 11:30 ■会場/ 講堂
リレーインタビュー・ダイアローグ

■第1部 (9:10 ~ 9:40)

女子商『企業市場』は高校生の何を変えたか?

インタビューイー●岡野 利哉 (福岡女子商業高等学校 教諭)



商業科の体験実習として、マーケットの開発・管理の一貫プログラムを導入し、協力企業と連携して、商品企画—仕入れ—検取—値付け—販売—經理の流れを高校生に担当させ、オリジナル商品の開発までを手がけた。当然、学校は事前の校内外の研修を充実させ、生徒は関係企業におけるインターンシップに参加した。結果的に、女子商マルシェ(市場)は祭りのような活況を呈し、地域とのつながりが強化され、集客数12,000人、売り上げ1,200万円の実績を上げて成功裡に終了した。実習過程において生徒は、接客、金銭授受、商品知識、ホスピタリティ精神などと格闘している。学校の教育思想、教職員の連帯、企業との協働方法、地域からの反応、生徒の評価と感想などを聞きたい。

インタビューワー●森本 精造 (福岡県飯塚市教育長)



福岡県社会教育課長、福岡県立社会教育総合センター所長、穂波町教育長を経て現職。穂波町時代、西日本で初めての「学校選択制」の導入。全公立小学校に導入した穂波「子どもマナビ塾」、合併後の飯塚市では「熟年者マナビ塾」などの多くの先駆的行政施策の開発を手がけて来た。中国・四国・九州地区生涯学習実践研究交流会代表世話人。

■第2部 (9:45 ~ 10:15)

学童保育になぜ教育プログラムが不可欠なのか?

インタビューイー●上野 敦子 (山口市井関学童保育 指導員)



山口県生涯学習推進センターの研修を機に、通常の学童保育にボランティア指導者を招いて教育プログラムを導入した。夏休みの一定期間から始めたプログラムが全期間に広がり、子どもの向上はもとよりボランティアも、指導員自身も、保護者との関係も、学校との関係も大幅に改善された。プログラム名は「井関夏休み元氣塾」。指導の基本理念は行動耐性と欲求不満耐性の形成。方法論の中核は規律ある暗誦—朗唱—各種の実体験と成果の発表。関係者は何ができなかったのか、何ができるようになったのか、何が分からなかったのか、何を分かるようになったのか、それぞれはどんな役割を果たしているのか。「元氣塾」がもたらした向上・変化の中身と方法を聞きたい。

インタビューワー●大島 まな (九州女子短期大学 准教授)



山口県の地域指導者養成プログラムや北九州市若松「未来ネット」事業の実践指導を手がけるかたわら、北九州市社会教育委員、文部科学省中央教育審議会教育振興基本計画策定特別部会委員、福岡県生涯学習審議会委員などを務める。共著に『生涯学習をとりまく社会環境』(学文社)、『よくわかる生涯学習』(ミネルヴァ書房)等がある。

■第3部 (10:25~10:55)

区政に市民参画は何をもたらしたのか？

インタビューイー ● 西之原鉄也 (前北九州市若松区長(現北九州市総務市民局理事))



北九州市教育委員会教育次長、若松区長を経て現職。若松区の人材育成事業「若松未来ネット」に注力し、終始市民の中にあつて行政との協働事業の先頭に立ち続けた。区長の研修参加は区が主催する事業の監督者と応援団長と参加者を兼ねて通年研修の社会的風土の形成に重大な影響を与えた。未来ネット事業の実験的試行は2年とも各グループそれぞれに実質的な成果を上げ、あるものは新規創成事業として地域の伝統文化を掘り起こし、また、あるものは市民センターのクラブ活動として継続している。これらの事業が団塊世代の退職後の活動に結びつけば、高齢社会を切り拓くモデル事業となる。参加層を拡大し、まちづくり事業を多様化し、官民の協働を進め、形成された人材のネットワークをどう生かすのかなどを聞きたい。

インタビュワー ● 古市 勝也 (九州共立大学 教授)

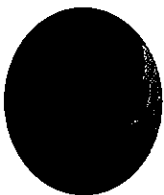


国立乗鞍青年の家、鹿児島県社会教育課、国立社会教育研修所を経て現職。著書に「生涯学習の方法」(第一法規)、「生涯学習論」(文憲堂)、「社会教育計画」(文憲堂)など。福岡県立社会教育総合センター、北九州市、岡垣町等と共同研究で地域活動「人材育成プログラム」開発実践中。

■第4部 (11:00~11:30)

相談事業はなぜ社会復帰に成功しないのか？

インタビューイー ● 谷口 仁史 (NPO法人スチューデント・サポート・フェイス(SSF) 代表理事)



SSFは会員約162名。現行の相談事業やカウンセリングの「待ち」の姿勢を全面転換し、不登校、引きこもり、非行等さまざまな不適應問題に当面する子どもを対象に「訪問型支援」に取り組んできた。具体的には、20代の若者を家庭教師として派遣し、個別クライアントにあわせた直接的な教育・相談支援を行っている。既存の相談事業や学校のカウンセリングプログラムなどと比較して、子どもの「改善率」・「社会復帰率」は圧倒的に高い。近年は実績を評価され、厚労省行政との協働を開始し、相談・指導対象をニート問題に広げて取り組み、大いに成果を上げている。事業の理念、方法論上の中核発想、クライアントとのコミュニケーションの方法、会員の研修、保護者からの反応などを聞きたい。

インタビュワー ● 三浦清一郎 (生涯学習・社会システム研究者)



国立社会教育研修所、文部省、福岡教育大学などを経て現在三浦清一郎事務所を設立。生涯学習通信「風の便り」編集長。近著に「しつけの回復、教えることの復権」(H20)、「変わってしまった女と変わりたくない男」(H21)、「安楽余生やめますか、それとも人間やめますか」(H22) (いずれも学文社)がある。